# 町民文芸

## 只見短歌会　令和三年五月詠草

調（ととの）わぬ声にて鳴き初むうぐひすの朝毎聞けば春おとづれぬ　馬場　八智

懸命にペタルを漕ぎて下校する生徒守るがに車距離おく　目黒　富子

友逝きて言葉なけれど世話受けつ共に語りし思い出ふかし　関谷登美子

駄目と聞き二年近くも頑張りし弟なれど納骨すます　渡部ゆき子

オドリコソウの花の蜜吸ひ幼孫枝捨てゆけばコップに活ける　新国由紀子

春寒し元同僚の思はざる訃報の葉書幾度も読む　渡部ヨリ子

リハビリを終へて戻れば「おやつです」介護士さんが紅茶持ちくるる　新国　洋子

（出詠順）

## 只見俳句会　五月定例会

宇多喜代子　指導

災いは過ぎ去るものと春耕す　弘　子

分けくれし友偲びつつ菊根分　真理子

季は来て夫の菜の花目映ゆかし　睦　子

主の居ぬ庭に四ツ葉のクローバー　礼

花ざかりかわす言葉もほがらかに　一　穂

うぐいすの声聞きながら散歩道　修　一

駒返る草や遊具の整いし　幸　生

豆を蒔く頃あいはあの藤の花　信

初めての使い筍届けらる　都

親子して自転車水見田植後

褐色の土手のキャンバス蕗の薹

青空も一緒に揚げる蕗の薹

糸ほどのさざ波起こし蝌蚪の群れ

留山にあらねど罰かタラの刺

寂しきは機械で田植え黄昏どき

コロナ禍や手酌の友に雨蛙

こいのぼり泣く子の口に飴が有り

春嵐エプロン裾に子を入れて